

# 変遷その他

芥川龍之介

青空文庫



## 変遷

万<sup>ばん</sup>法<sup>ぽふ</sup>の流<sup>る</sup>転<sup>てん</sup>を信<sup>い</sup>ずる僕<sup>へど</sup>と雖<sup>も</sup>、目<sup>もく</sup>前<sup>ぜん</sup>に世<sup>せ</sup>態<sup>たい</sup>の<sup>へん</sup>変<sup>せん</sup>遷<sup>せん</sup>を<sup>見</sup>て  
 は多少の感<sup>な</sup>慨<sup>き</sup>なきを得<sup>え</sup>ない。現<sup>げん</sup>にいつか垣<sup>かき</sup>の外<sup>け</sup>に「茄<sup>なす</sup>子<sup>び</sup>の苗<sup>なへ</sup>や胡<sup>き</sup>  
 瓜<sup>うり</sup>の苗<sup>めい</sup>、……ヂギタリスの苗<sup>めい</sup>や高山植物<sup>こうざんじぶつ</sup>の苗<sup>めい</sup>」と言<sup>い</sup>ふ苗<sup>めい</sup>売<sup>う</sup>りの声<sup>こゑ</sup>  
 を聞<sup>き</sup>いた時<sup>とき</sup>にはし<sup>し</sup>みじ<sup>じ</sup>み時<sup>じ</sup>好<sup>かう</sup>の移<sup>うつ</sup>つたこと<sup>こと</sup>を感<sup>かん</sup>じた。が、更<sup>さら</sup>に驚<sup>おどろ</sup>  
 いたのはこの頃<sup>ころ</sup>ふと架<sup>か</sup>上<sup>じやう</sup>の書<sup>しよ</sup>を縁<sup>えん</sup>側<sup>がわ</sup>の日<sup>ひ</sup>の光<sup>ひかり</sup>に曝<sup>さら</sup>した時<sup>とき</sup>である。  
 僕<sup>わが</sup>は従<sup>じゆ</sup>来<sup>き</sup>衣<sup>い</sup>魚<sup>ぎよ</sup>と言<sup>い</sup>ふ虫<sup>むし</sup>は決<sup>けつ</sup>して和<sup>わ</sup>本<sup>ほん</sup>や唐<sup>たう</sup>本<sup>ほん</sup>以外<sup>いげん</sup>に食<sup>く</sup>はぬものと  
 信<sup>しん</sup>じてゐた。けれども千<sup>せん</sup>九<sup>く</sup>百<sup>ひゃく</sup>二<sup>に</sup>十<sup>じゆ</sup>五<sup>ご</sup>年<sup>ねん</sup>の衣<sup>い</sup>魚<sup>ぎよ</sup>は舶<sup>はく</sup>来<sup>き</sup>本<sup>ほん</sup>の背<sup>せ</sup>などに  
 も穴<sup>あな</sup>をあけてゐる。僕<sup>わが</sup>はこの衣<sup>い</sup>魚<sup>ぎよ</sup>の跡<sup>あと</sup>を眺<sup>なが</sup>めた時<sup>とき</sup>に進<sup>しん</sup>化<sup>か</sup>論<sup>ろん</sup>を思<sup>おも</sup>ひ、

ラマルクを思ひ、日本文化の上に起つた維新ゐしん以後六十年の変遷を思つた。三十世紀の衣魚はことによると、樟しやうなう脳なうやナフタリンも食ふかも知れない。

或抗議

「文壇に幅を利かきせてゐるのはやはり小説や戯曲である。短歌や俳句はいつになつても畢つひに幅を利かせることは出来ない。」——  
 僕の見聞けんぶんする所によれば、誰でもかう言ふことを信じてゐる。  
 「誰でも」は勿論小説家や戯曲家ばかりを指さすのではない。歌人や俳人自身さへ大抵たいていかう信じるか、或はかう世間一般に信じて

ゐられると信じてゐる。が、堂堂たる批評家たちの短歌や俳句を批評するのを見ると、不思議にも決して威張つたことはない。いづれも「わたしは素人であるが」などと謙抑の言を並べてゐる。謙抑の言を並べてゐるのとはもとより見上げた心がけである。

しかしかう言ふ批評家たちの小説や戯曲を批評するや、決して

「素人であるが」とは言はない。恰も父母未生前より小説や

戯曲に通じてゐたやうに滔滔、聒聒、絮絮、綿綿と不

幸なる僕等に教を垂れるのである。すると文壇に幅を利かせてゐ

るのは必ずしも小説や戯曲ではない。寧ろ人麻呂以来の短歌であ

り、芭蕉ばせを以来の俳句である。それを小説や戯曲ばかり幅を利かせ

てゐるやうに誣しひられるのは少くとも善良なる僕等には甚だ迷惑

と言はなければならぬ。のみならず短歌や俳句ばかりいつまでも  
 幅を利かせてゐるのは勿論不公平を極めてゐる。サント・ブウヴ  
 も或は高きにゐてユウゴオやバルザックを批評したかも知れない。  
 が、ミュツセを批評する時にも格別「わたしは素しろうと人であるが」  
 と帽子を脱がなかつたのは確かである。堂堂たる日本の批評家た  
 ちもちつとは僕等に同情して横暴なる歌人や俳人の上に敢然と大だ  
 鉄槌いてつつぬくだを下すが好よい。若し又それは出来ないと言ふならば、――  
 僕は当然の権利としてかう批評家たちに要求しなければならぬ。  
 ——僕等の作品を批評する時にも一応は帽子ぼうしを脱いだ上、歌人や  
 俳人に対するやうに「素人であるが」と断ことわり給へ。

「……自分の如きものにさへ、屢々手紙を寄せて交を求めた婦人が十指に余る。未だ御目にかかつた事はないが夢に見ましたと云ふのがある。御兄様と呼ぶ事を御許し下さいませと云ふのがある。写真を呉れと云ふのがある。何か肌に着けた物を呉れと云ふのがある。使ひ古した手巾を呉れば処女として最も清く尊きものを差上げますと云ふのもあつた。何たる清き交際であらう。……」

これは水上滝太郎君の「友はえらぶべし」の中の一節である。僕はこの一節を読んだ時に少しも掛値なしに瞠目した。水上君

の小説は必ずしも天下の女性の読者を随喜せしめるのに足るものではない。しかも猶彼等の或ものは水上君を御兄様を称し、又彼等の或ものは水上君の写真など（！）を筐底に秘めたがつてゐるのである。翻つて僕自身のことを考へると、——尤も僕の小説は水上君の小説よりも下手かも知れない。が、少くとも女性の読者に多少の魅力のあることは決して「勤人」や「海上日記」や「葡萄酒」の後には落ちない筈である。しかし行年二十五にして才人の名を博してよりこのかた、僕のことを御兄様と呼んだり、僕の写真を欲しがったりする美人の手紙などの来たことはない。況や僕の手巾を貰へば、「処女として最も清く尊きものを差上げます。」と言ふ春風万里の手紙をやである。

僕の思はずだうもく 瞳目したのも偶然ではないと言はなければならぬ。

けれども偶たまたまかう言つたにしろ、直ちに僕を軽蔑するならば、そ

れは勿もちろん論大早計である。僕にも亦また時に好意を表する女性の読者

のない訣わけではない。彼等の一人ひとりは去年の夏、のべつに僕に手紙を

よこした。しかもそれ等は内容証明でなければ必ず配達証明だつ

た。僕は万事を抛はうてき擲して何度もそれ等を熟じゆくどく読した。實際又

僕には熟読する必要もあつたのに違ひない。それ等はいづれも百

円の金を至急返せと言ふ手紙だつた。のみならずそれ等を書いた

のは名前も聞いたことのない女性だつた。それから又彼等の或も

のは僕の「春服しゅんぷく」を上じやうし梓した頃、絶えず僕に「アララギ」

調の写生の歌を送つて来た。歌はうまいのかまづいのか、散文的

な僕にはわからなかつた。いや、必ずしも一首残らずわからなかつた次第ではない。「日の下の入江した いりえ音なし息づく

と見れど音こそなかりけるかも」などは確かに僕にもうまいらしかつた。けれどもこの歌はとうの昔にもう斎藤さいとうもきち茂吉君の歌集に出てゐるのに違ひなかつた。それから又彼等の或ものは僕の支那へ出かけた留守るすに僕に会ひに上京した。僕は勿論不幸にも彼女に会ふことは出来なかつた。が、彼女は半月ほどした後のち、はるばる僕に一すぢの葡萄ぶどう色いろのネク・タイを送つて来た。何でも彼女の手紙によれば、それは明治天皇の愛用し給うたネク・タイであり、彼女のそれを送つて来たのは何年か前に墓になつた母の幽霊の命令に従つたものだとか言ふことだつた。それから又彼等の或ものは、……

兎とに角かく僕にも手紙を寄せた女性の読者のゐることは疑ふべから  
 ざる事実である。が、彼等は僕に対するや、水みな上かみ君くんに対するや  
 うに纏てん綿めんたる情じやう緒しよを示したことはない。これは抑そもも何なんの為  
 であらうか？ 僕は僕に手紙を寄せた何人かの天てん涯がいの美人を考  
 へ、つまり僕の女性の読者は水上君の女性の読者よりもはるかに  
 彼等の社交的趣味の進歩してゐる為と断定した。成なる程ほど彼等の或  
 もものは彼女自身の歌の代りに斎藤君の歌を送つて来た。しかしそ  
 れは僕のことを夢に見ると言ふ代りに、彼女も僕の先輩たる斎藤  
 君の歌集などを読んでゐることを伝へたのであらう。又彼等の或  
 もものはお兄にい様さまと僕を呼びたかつたかも知れない。が、彼女の遠  
 慮深さは百円の金を返せと言ふ内容証明の手紙を書かせたのであ

る。又彼等の或ものは明治天皇の愛用し給うた——これだけは正  
 直にはくじよう白はくじよう状すれば、確かに僕にも難解である。けれども彼女の  
 淑つつましさの余り、僕の手ハンケチ巾を呉れと言ふ代りに、歴史的意義ある  
 ネク・タイを送つて来たのではないであらうか？ 僕の女性の読  
 者なるものはいづれも上かみに示したやうに織せんさい細な神経を具そなへてゐ  
 る。して見れば水上君に手紙を寄せた無数の女性の読者よりも数  
 等すぐ優れてゐると言はなければならぬ。よし又僕の断定に多少の誤  
 りはあるにしろ、——たとへば彼等の或ものは不幸なる狂人だ  
 ったにしろ、少くとも唐たうとつ突として水上君に手ハンケチ巾を呉れと言  
 った読者よりも氣違ひじみてゐないことは確かである。僕はかう  
 考へた時に私ひそかに僕自身の幸運を讚さんび美しない訣わけには行ゆかなかつた。

日本の文壇広しいへどと雖も、僕ほど艶えんぶく福ふくに富んだ作家は或は一人ひとりも  
ゐないかも知れない。

(大正十四年八月)



# 青空文庫情報

底本：「筑摩全集類聚 芥川龍之介全集第四卷」筑摩書房

1971（昭和46）年6月5日初版第1刷発行

1979（昭和54）年4月10日初版第11刷発行

入力：土屋隆

校正：松永正敏

2007年6月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

# 変遷その他

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>